

東 彼 杵 ダ ラ フ

5 / 23 郷 ハ反田郷

8月に入っても梅雨のようなジメジメした日が続き
今にも泣き出しそうな空のもと、八反田郷を探った。
しっとりとした山々は緑が色濃くなって魅力的で
素敵な女性たちとの出会いが心を晴れやかにしてくれた。

制作 地域おこし協力隊
文 飯塚将次
写真 堀越一孝
編集・デザイン 小玉大介





↑ 突風に波打つ稲穂といつも通り穏やかな大村湾



↑ コンクリートの水たまりでオタマジャクシを発見

↓ 暑い夏でも快適な環境で育てられていた



東彼杵町のほぼ中心部に位置する八反田郷。国道34号ともうひとつの主要道路である大村湾グリーンロード沿い、八反田郷グラウンドに車を止めた。すぐ横にある鬱蒼とした道を進む。あたりは竹林で太い竹が逞しく伸びていて見事。だが風景がしばらく変わらない。人に出会うこともなさそうなので、引き返すことにした。

芋洗川交差点から東そのぎグリーンテクノパークの方へあがってみる。雨雲の隙間から少しだけ日が差すと、セミがシィ、シィ、シシシシシーと騒ぎ出した。トンボもここぞとばかり乱舞する。喧噪を離れた水たまりだけは別世界。足付きオタマジャクシがゆらゆらと泳ぎ、時折、空気の補充へ水面に顔を出してパクパク。

セミの鳴き声に混じって重低音が響いた。牛舎がある。開放口から中をうかがっていると、「こっちに回って来んば」と山口ナツ子さんが笑顔で声をかけてくれた。

入口には口蹄疫を予防する消石灰が撒かれている。気軽に立ち入れない場所だとわかり、緊張しながら中へ。見知らぬ3人が訪問したためか、牛たちが少しぎわついているのがわかる。

「お父さんももう少しで帰ってくるけん」とナツ子さん。変らない優しい顔だった。



↑「競走馬と同じで父系の血統が重要」と英也さん
 ← お気に入りの帽子はオーストラリアで購入

東彼杵町で40年以上、肥育牛の飼育・出荷を生業とする山口畜産。大村湾を一望するこの地には、東そのぎグリーンテクノパーク造成にともない移転した。現在は約350頭の黒毛和種を、主に親子3人で管理している。ここで育てられた肥育牛は食肉センターへ出荷され、“長崎和牛”として流通される。私たち3人にとっては高嶺の花というか、高値の肉というか。敷地に入った際に緊張した理由でもある。

空のトラックに乗った山口英也さんが戻ってきた。トレードマークのカウボーイハットがよく似合う。英也さんも心地よく受け入れてくれ、事務所で話を聞くことができた。

「うちは肥育牛を育てとる。市場で子牛をかうてきて、約20か月育てて食肉用にするのが仕事。ここにおる牛はすべてに名前があつて、戸籍謄本のようなものもある」と英也さんが子牛登記を差し出した。

子牛登記は出生3か月以内に鼻紋を添付して出生届けをした子牛に発行されるもので、三代祖までの父母名や能力などが記載されている。鼻紋は人でいう指紋にあたり、個体を識別するために重要な役割を持つという。

牛舎に移動して三女の恵子さんも加わった。「牛の耳に付いている黄色のなんだかわかります？」牛の1頭1頭に耳標と言われるものが付き、それぞれに違う番号が書かれている。

「和牛と認められた牛には個体識別番号が必ずあります。インターネットの“牛の個体識別情報検索サービス”でこの10桁の番号を調べると、どこで生まれ、誰が育てた牛なのかを誰でも確認することができるんですよ。精肉店やスーパーで販売する牛肉で確認してみてください」

消費者は食の安全性に対する関心が高まっているが、このようなトレーサビリティシステムはそれほど浸透していない。「私たちは丹精込めて育てていますので安心して美味しい牛肉を食べてください」と力強い。最後に仕事について聞いてみた。

「姉が2人いますが、私が手伝うのだろうと小さい頃から思っていました。好きか嫌いかで言えば間違はなく嫌いではないですね(笑)」と話す。写真を撮り終えた後、「今日はかわいいのを着ていてよかった」とポツリ。生産者から女子の顔になって微笑んだ。



← 子牛登記から美味しい食べ方まで教えてくれた
 ↓ 山口さん親子の暮らしを知り合いが詩に



大村湾グリーンロードの下を通る県道 190 号に出て龍頭泉方面へ向かった。平行するように流れる千綿川は、このあたりから穏やかな河口部とは違う、溪流の雰囲気が変わる。

しばらくして、数台の車を見送る永富由美子さんに出会った。溪流と棚田に茶畑まであり、東彼杵町の美しい魅力を借景にして「聖流庵」は建てられている。こちらは永富さんの個人別荘だがイベントやセミナーなどの際に開放することがあるという。この日は大学生が千綿川の調査研究で利用していた。

「私は竹炭を作っています。一度火を入れると焼きあがるまで 15 時間ほどかかります。その時間を利用して、お友達とおしゃべりして、お料理して、寝泊りして。要するに遊ぶところが欲しかったんです (笑)」と永富さん。

別荘は永富さんのこだわりが随所に見られる。周辺の大小さまざまな岩は豊かな自然に溶け込むようにあえて残した。露天風呂もある。ピザ窯もある。ハチミツも作っている。

室内には大きなガラス窓が配置され、四季折々の趣でゲストを楽しませてくれる。一番のおすすめは 5 月下旬から 6 月上旬に観賞できるホテル。「森が季節はずれのクリスマスツリーのようになってきれいなんですよ」と目をキラキラさせて話す。

永富さんは八反田郷自治会愛護会で、きれいな千綿川を守る活動をしている。今年 5 月にはホテルまつりを開催し、好評だった。「今までは仲間うちだけで楽しんでいましたが、それではもったいないと思って。まつりには町外からも来ていただきました。来年以降も続けていきたいですね」

山間の小さな光が多くの人を惹きつける。明るく楽しく、前向きに生きる永富さんもその輝きのひとつだった。



↑「龍頭泉まで歩いて魅力を感じて」と永富さん

※ 八反田郷へは、町営バス
「中ノ坪」「昭和橋」のバス停を利用。

次回は中尾郷。お楽しみに！

